

川崎地質の東北支店に友人がおられる大学の指導教官から紹介されたのが、入社を希望したきっかけです。いずれ出身地の北海道に戻って働くなら、若いうちに小さい事業所でいろいろな仕事を経験する方がいいと考え、そのことを入社試験の面接で話しました。実はこれ、指導教官からアドバイスしていただいたことでした。面接で社長と総務部長を前にそのまま話した私は、何とも生意気な学生と思われたかもしれません。

川崎地質 代表取締役専務執行役員企画・技術本部長 太田 史朗氏

期待に込めてこそ価値が



地質断面図を作成し、物性値を決めて設計につなげる。地質調査は基本的にこうしたサイクルで進められますが、港湾や鉄道施設の整備、河川改修、軟弱地盤改良など、対象となる業務分野は多岐にわたります。同じ条件の現場はなく、私にとって面白くやりがいのある仕事でした。

入社1年目に、橋梁建設のための調査を担当した時のことです。橋梁基礎の設計者から基礎形状が大きくなり過ぎるため洪積層の砂質土に粘着成分があるかを調べられなしかと相談されました。橋梁基礎の設計は通常、砂質土の粘着成分をゼロとして扱いますので、これを見込めれば基礎形状が大変に残念がるのを見て、たとえ口約束だったとはいえ、期待されたことに応えなくては、われわれコンサルタントの価値はないと、深く反省し以後の教訓としました。

入社3年目から携わった堤防整備の地質調査では業務領域も広がり、土取場の候補地探しや軟弱地盤対策工の設計などを担当します。さらに現場

に1年間常駐させてもらい、施工管理的な仕事もこなしました。地盤の専門家として調査・設計だけでなく、施工にもどう関われるかが分かり、とても貴重な経験となりました。

私たちの世代は、入社まもなく現場管理からリポートの作成まで、ほぼ一人で担当していました。若いころは未経験の仕事ばかり。こういった

支店長への報告で緊張したのか鼻血が (2001年ころ)



場合はどうすればいいのかと聞きたくても、教えていただける人を探すのが大変でした。これまでやってこられたのは、社是である「協力一致」の精神で、周りの皆さんに助けってもらってきたおかげと感謝しています。

若い人々には、前例にとられないでほしいと思っています。例えばリポートの作成でも前例踏襲のまとも方なら楽ですが、より良い内容のものを提案しようという向上心を持ってください。技術者であるからには、常にバージョンアップを目指してほしいと期待します。

(おおた・しろう) 1996年秋田大学鉱山学部資源素材工学科卒、川崎地質入社。理事北日本支社技術部長、同支社技術開発部長、取締役兼執行役員北日本支社長、常務執行役員などを経て、2023年2月から現職。北海道出身、53歳。

